

わたしのくらし 地域の歴史⑧ 「みずくらいど」の謎

白梅分館職員が講座の企画でみずくらいどに關しての資料をあたっていたところ、平成19年2月に行われた福生古文書研究会主催のパネルディスカッションの記録集に出会いました。パネリストは高崎勇作氏（福生古文書研究会会員・福生市文化財保護審議会会長）と角田清美氏（高校教諭）のお二人です。

議論の争点は、高崎氏の「失敗した工事は五丁橋下流から現在の玉川上水の西側を掘り進み、拝島駅北口の平和橋付近に至るルート全体」という見解に対し、角田氏は「ルート全体を掘ったのではなく、現在のたまスイミングアカデミー

付近まで掘ったが、勾配を見誤ったため、そこで掘り進むのを断念した」というものです。白熱した議論が交わされましたが、結論を導くには至りませんでした。しかし、そこには非常に興味深いお話が掲載されていました。フロア参加者・上田氏から「昭和32年に自宅を建築する時、空堀があった（要旨）」との発言です。そこで、発言者の上田勝三さん（元中学校長）と高崎勇作さんに玉川上水やみずくらいどの不思議、そして昔のくらしを語っていただきました。

「自宅に堀跡があったんだよ」 高崎 上田先生のお名前はずつと以前から伺っていました。私が玉川上水に関わりはじめたのは昭和53年です。その当時、熊川の先輩から、上田先生という中学の理科の先生が（玉川上水を）研究していらつしやる、と教えていただきました。初めてお会いしたのは、平成19年2月10日のパネルディスカッションの少し前です。その時、上田先生から自宅を建てる時に堀跡があった、というお話をうかがいました。私がお聞きしたかったことを先生がほろりともらしてくださいました。私にとつてはインパクトがあり、まさに神がかり的な出会いでした。

上田 今日古い写真をもつてきました。昭和33年に家を作った時の写真です。（※パネルディスカッションでの発言は昭和32年となっているが、写真裏側の印画の日付は昭和33年7月5日となっている）その当時の状況が少しわかります。



写真1 玉川上水開削工事跡（みずくらいど公園）

玉川上水は江戸町民の飲料水不足を補うため、承応二年（1653）に着工し、翌年羽村から四谷大木戸までの約43キロが完成しました。伝説によると、この工事は2度の失敗があったとされています。その一つが熊川の「みずくらいど（水喰土）」（玉川上水開削工事跡）です。上水の水を流すと、この地点で水がすべて地中に吸い込まれてしまったと伝えられています。そのため現在の玉川上水の流路に掘り替えられています。

五丁橋の下流約100m地点からは失敗した上水の堀跡が一部残されており、市の史跡に指定されています。



写真2 建築中の上田宅 昭和33年頃



と山ありました。それを平らにしました。

高崎 いいですね。このような絵をみると物語がひろがってきます。

上田 そこにリヤカーを引きいれて作業しました。ここ（リヤカーのあるところ）に堀があったのです。そしてケヤキの木などがあったのでそれを切り、平らにしました。

高崎 パネルディスカッションの時に、底の幅が5mくらいあり、リヤカーが十分回れた、とおっしゃっていました。

「こんなところにローム（注1-4ページ）がある」

上田 （スケッチ2-3ページ）こつちの土手（B）現在マンションが建っている方向）がガラガラ崩れていました。それが積もつてくるのです。ここ（C）から下には赤土（※ロームのこと）はないです。上にはところどころに赤土のかた

まりがありました。砂利があつたりロームがあつたり、砂利とロームが重なつていたりして、ここはローム層がずつと平らにあるような状況ではないようです。一番上層は黒土、表土です。今はマンション建設のため補強して見えなくなつ